
によろっといきます。

柚唄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

によるっといきます。

【Nコード】

N2816Q

【作者名】

柚唄

【あらすじ】

どこかの世界の魔法の物語。隠された王子、入れ替わった二人、変な王室……。ねえ、ホントのこと、わかる？

01. 集会とトワ（前書き）

はじまります。短めです。

01. 集会とトワ

ジリリリリリリッ！
ジリリリリリリッ！
ジリリバンッ

目覚ましは叩かれて、音を止める。

「うへえ……眠い……このまま寝たい……。」

目覚ましを止めた張本人は眠気に負け、そのまま眠りに落ちようとした。とした、だけ。それをイザナが許す訳がない。

目覚ましは鳴ってすぐにベットから身を起こし、すでに髪の毛も整えたイザナは、ヤノのほっぺを掴みぐにゆりと捻ったそう、ぐにゆり、と。

「うぎぎぎぎうや、ひ、ひや、痛っ痛たたた起きる起きるお願いだから放してえええええ！」

その尋常ではない痛さによりヤノはすぐに覚醒した。ちょっと涙目だけど。

ヤノの目がしつかり覚めたのを確認したイザナは、ちつとも悪びれず制服に着替える。

「おはよーヤノ。今日は集会だから早くしなよ？」

「うん、りよーかいー。」

集会かあ……。とヤノは髪を梳きながらボンヤリした頭で考える。何かあんなのかな？

「今日なんかあんの？」

「先生の話ぐらい聞いときって。集会があるのも知らなかったの？ なんか今日お客さん来るんだってさ。わかったら手を動かしなよ

」。

そう言ってイザナは部屋を出て行った。あ、もう着替え終わったんだ、と1人納得したヤノは

「お客さん、ねえ……オレ興味ないわあ……。」

と1人呟いた。もちろんしつかり手を動かして着替えている。

「あれ、オレの短パンどこだろ。」

着替え終わったのはいいものの、スカートの下に履く短パンが見つからない。ヤノは下がスースーするのが好きじゃない人である。けれど見つからないものは仕方がない。とりあえず部屋を出て洗面所で歯磨きをしてくることにした。

ヤノが洗面所から出ると、いい匂いがした。多分イザナの作った朝ご飯だろう。2人がルームメイト兼幼馴染みとして決めたことがある。それは、寮の中では料理や掃除をイザナがするかわりにヤノが先生から与えられた雑用を来なす、ということだ。

イザナはそれなりに料理や掃除をするのが好きだし、ヤノも自分は雑用をする方が性に合うと考えてるから決めるも何もないが。

「今日もパンとコンスープだよー。さ、食べよ！」

「おいしそ。イザナはいいお嫁さんになるなー。」

「はいはいどうも。いただきます！」

「いっただっきまーす。」

毎朝お馴染みの会話。それを今日も繰り返して朝ご飯を食べる。暫くは食器の音と咀嚼音が続き、食卓は無言になる。喋ってると食べるのが遅くなるからだ。先に食べ終わったイザナは席を立つと部屋に2人分のカバンを取りに行き、それを見たヤノは残りのパンとスープを口に掻き込んだ。結果噎せた。

「ケホツケホツうげっ。」

部屋から出てきたイザナはそれを見て呆れながら

「大丈夫？はい、これヤノのカバン。ほら、行くよ。」

ヤノにカバンを渡して玄関へ向かう。

「あ、ケホッ、うん、行くー。」

とヤノはそれに答えてイザナを追いかけるために走り出す。

これも毎朝お馴染みの風景だ。

そうして2人は学校へ向かったのだった。

学校と言っても、2人は学園の寮に住んでいるので走ればすぐに着く。2人が通ってるアラーレ学園は領地の真ん中が広場となっている。広場には「心の通いし場所」という胡散臭い名前が付けられているが、非常に呼びにくいため生徒達には広場かコロカという呼び名で親しまれていたり。その広場を中心として校舎や寮が立っていて、施設がズラッと円のようにになっている。広場はとても広く、生徒や職員など全員いても狭くないので集会などはいつもここで行われているのだ。

集会の開始時間になんとか間に合った2人は他の生徒に紛れて喋っていた。そこに、オーラル学園長が現れる。透明な魔法石を手持っていた。無唱魔法を使ったのだろうか、学園長の声がコロカに響いた。

「みなさん、おはようございます。今日はみなさんにお知らせがあります。」

集会で知らせるようなことなのだから重大なことに違いない。そのことに気付いて生徒達は何があるんだろうと考えた。

「なんと、本日。アラーレ学園の授業を見学しにヨニ王子がいらっしやいます！」

その一言でコロカは歓喜に包まれた。特に、女生徒の黄色い声で。

「え、な、なんじゃとした!？」

ヤノはその五月蠅すぎるほどの歓声に耳を塞ぎながら慌てふ

ためく。それにイザナは少し驚いた顔をも耳を塞ぎながら答える。

「ほら、隣の国のイステリアにイケメン王子いるでしょ？そのヨニ王子が今日来るんだって。」

はあ…、とヤノが呆けた声を出して答えた。

「静粛に！」

声の五月蠅さに堪えかねた学園長が怒鳴る。

「決して失礼のないように！ヨニ王子に何かあっては外交上の関係に問題をきたすのでな。心して接するように！以上！」

鶴の一声により、生徒は授業へと足を向けた。

「ヨニ王子、か……。」

ヤノと2人で校舎の方へ歩きながら、イザナはぽつりと呟く。

「ん、イザナなんか言ったー？」

「え、ううん？い言っていないよ？聞き間違えたんじゃない？」

「空耳マジ……。」

ヤノに聞こえてたのか。イザナは表情には出していないが内心とてもバクバクしていた。

「（ヨニ王子って……いいや、考えるのやめとこ。）」

チャランチャンチャラーンと綺麗なオルゴールの音がカバンから流れる。

「イザナ、通信来てるけど取らなくていいの？」

「え、あ、うん、取る取る。」

そう言っってイザナが取り出したのは金色の魔法石が付いた懐中時計だ。この懐中時計には通信機能を果たす役割がある。オルゴールが内蔵されていて、通信が来るとオルゴールが鳴って知らせてくれるのだ。

「あ、トワみたい。」

オルゴールを開いて魔法石による魔力波認証がされると相手

が誰だかわかるのだ。

トワはヤノとイザナにとっては家族のような、大切な存在。もちろん、ヤノとイザナも互いを大切に思っている。

「トワ、おはよう。」

イザナは今、口に出して懐中電灯に喋りかけているが、本来念じるだけでも相手に伝わる。しかし、ヤノ達のような下級生にはそれを禁じられている。理由は教えられていないが、これを破ると罰則を食らうということらしい。重大機密事項なのだろうか。

「え、体調悪いの？………それなら仮病やめといた方がいいよ！今日はヨニ王子がいらっしゃるんだよ！……で、でも今日は初めての魔法の実践授業だし………んもう、しょうがないなあ、わかったよ。授業追いつけなくなっても知らないからね？……うん、バイバイ。」

オルゴールがチャン、と鳴る。どうやら通信が切られたようだ。

「トワ、今日は仮病で休むの？」

「うん。……あいつ何考えてんのかな……。」

「実践授業怖いとか？」

ホントにそうならマジ……とヤノが笑いながら言う。

「ま、とりあえず行こー？」

「あ、うん、行こっか。」

2人ともトワ少し疑問を残しながら、校舎に向けて走り出した。

01. 集会とトワ（後書き）

どうでしたか？ まだまだ初心者でしっかりかけてないと思われそうです。誤字脱字、アドバイスなど何かありましたらよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2816q/>

よろっといきます。

2011年1月26日00時46分発行